

# <時代を創った女たち> 染織家 志村ふくみ（人間国宝）

志村 ふくみ しむら ふくみ

（H24.5.7と14の再放送）

たて糸は伝統よこ糸は現代

1924（大正13）年9月30日滋賀県生まれ。まもなく米寿を迎える。現在は京都市右京区嵯峨野在住。染織作家、随筆家。1942年（昭和17年）、文化学院卒業。文化学院の1学年上級には女優の高峰秀子がいた。31歳のとき母の指導で植物染料と紬糸による織物を始める。重要無形文化財保持者（人間国宝）、1993年文化功労者。

著書に『一色一生』（大佛次郎賞）、『母なる色』、作品集に『織と文 志村ふくみ』、『続 織と文 篝火』、限定本『裂帖』がある。



伝統をたて糸に、自然の色をよこ糸に染めて織りあげる日本工芸会会員、日本伝統工芸展審査員である志村ふくみさんの手織紬の、輝くような美しさは、見る人の目と心を強くとらえて離しません。そこには、一筋に命をかけた人の仕事がかがえます。

—— 玉三郎  
別冊・婦人画報「玉三郎」掲載 昭和52年11月発行婦人画報社

80歳の時、何もしたくなくなった。ウツ状態。家に引きこもり生きていくのが苦しくなって病院に入った。半年ぐらい病院にいたら、何かしたくなって退院。優しい色の毛糸からスタートし、編み始めた。家での布のカラーージュに集中できエネルギーがわいてきた。以前より仕事に意欲がわいてき、布が私を励ましてくれた。病気は転機だった・・・

こ布（ぎれ）でも、ひとつひとつ命を持っていて、私にささやいてくる。主張がある！ 忘れないで、使って・・・と言っている。米寿を迎える前の発表会では、抜けるような明るい「みずあさぎ色」を織った。若々しさがみなぎっている。老いて、幼子に戻る感じ・・・

最近の一日。まず釈迦堂にお参りし、小川沿いに散歩をする。日々、旬の色を感じている。色を出す草を煮て、こして、媒染して糸に色がつく。

色をだす草は植物、糸は蚕（動物）からのもの、色と糸を結ぶ媒染剤は鉱物。これらの自然界の植物・動物・鉱物がコラボして染織がなりたっている。

織物は下ごしらえが大切。織り上げた着物を着ると女性が美しく見える。若い人にもっともって着てもらいたい！

自分の最初のイメージにそって作品をつくっていく。織物にぼかしを出していくと起伏がでて深みが加わる。染が出来なければぼかしもできない。一本一本の糸が大切。絵の具を作っている感じ。秘密は色を混ぜないこと。それぞれの主張にに耳をそばだてる・・・植物の命をいただき、色をだしている。自然に対する畏敬の気持が大切。色の中に人生が見える。

工房に働く人は3年がひとくぎり。自然からの直接のメッセージを生かして欲しい。真面目にやればやるほど出費が多い・・・。

今後は若い世代に、染織の世界、美の世界（日本の色彩文化）を伝えていきたい。広く深い世界へ・・・。  
若い人が希望。

若い人たちに、好きな色を聞くと、黒・・・と答える人達がいる。人間の原点が疲弊すると無彩色・・・黒が好きになるのかな？

自然を相手にした教育、小さい時から感性を深める教育が大切だと思う。

最近、浜松の美術館ではガラス越しに着物を展示・見るだけではなく、機織機を持ち込み、物を作る現場体験を提供した。

自然が教えてくれることは無限にある！

命ある限り植物と向かい合って仕事をしたい！

## 志村 洋子

東京生まれ。染織作家。「藍建て」に強く心を引かれ、30代から母、志村ふくみと同じ染織の世界に入る。1989年に、宗教、芸術、教育など文化の全体像を織物を通して総合的に学ぶ場として「都機工房（つきこうぼう）」を創設。作品集に『志村洋子 染と織の意匠 オペラ』がある。

## 都機工房 TSUKI-kobo

京の都で機を織る人たち——  
月の暦で藍を建てる人たち——  
の意を表わしている、道元禅師の「正方眼蔵 都機の巻」より名前を頂く。京都嵯峨にある、この工房で藍を建て、植物で染め、機で織り、着物にしている。工房の主宰者は志村親子。

